

ホイッスラーと袖を分かつことになる事情も紹介され、最後にワイルドの思想は彼の「審美的服装」に表現されると結論されました。「審美的服装」(aesthetic costume)ということだが、シンポジウムで最初に論じられた「ワイルドの服装」に還ることになり、3氏の論陣は鮮やかにワイルドの美術評論家としての存在を照らし出したことになりました。めでたい止揚統合です。

めでたくないのは本稿です。メ切日におくれて、編集担当の先生にご迷惑をおかけしました。しかしワイルドの極印の証(あか)して許して頂きます。ワイルドの立言によれば「時間厳守は時間泥棒です」。

装いの哲学—ワイルドの芸術論の一形態として—

河内 恵子

(慶應義塾大学助教授)

Granville Hicks がその著 *Figures of Transition* (1939) で指摘しているとおり、ワイルドは自己宣伝という手段を用いて自らの芸術論を世に問い、その芸術論の体現者として自らを限りなく象徴化していった。具体的に述べてみよう。

1878年 Oxford 大学を卒業したワイルドは、“a Professor of Aesthetics and a Critic of Art”として世に出た。その際、世間の人々の注意を引く為に彼がとった手段は“aesthetic costume”を身につけることであった。自らの考えに耳を傾けてもらうには、まず自らの存在を知ってもらわなければならない。存在を知ってもらう為には何か奇抜なことをして自らを見てもらわなければならない。「単純」「軽薄」といった類のそしりを受けることは十分に承知していたが、いや承知していたからこそ、ワイルドは敢て“aesthetic costume”を装うという「単純軽薄」な手段に頼ったのだ。こうすることによって確実に世間の人々の注意を引き、ひいてはジャーナリズムに携わる人たちの意識を自らの方に引き付けることが出来るとワイルドは信じて疑わなかった。服装という「外面」のもつ重要性を熟知していたワイルドであったからこそ、自己宣伝の為にこの「外面」を巧みに利用しえたのである。しかし「外面」すなわち「装い」に対するワイルドの関心は「自己宣伝」の段階にとどまるものではない。衆人の注目を浴びる為に“aesthetic costume”を身にまとい、この自己宣伝によって文人としての生を生き始めたワイルドが、「装う」ことに抱き続けた関心は非常に深く、その「表層の美学」を「装いの哲学」と言い換えてもあながち間違いとはいえない。

「装う」という表層的・外面的概念が内包する深遠な意味を、ワイルドはさまざまな文学ジャンルを通して伝えようとしていた。ワイルドの芸術世界を語る際に忘れてはならないこの「装いの哲学」の一端を見てみたい。

1884年の *Pall Mall Gazette* への投稿で、ワイルドはコルセットの類で体を締めつけることの不健全さと醜悪さを嘆き、胴ではなく肩をポイントにしてゆったり流れるフォームをもつギリシア式服装を賞賛している。健康と自然の美しさの為に、不自由を強いる服装を放棄しようとは彼は呼びかけている。また1891年の *Daily Telegraph* への投稿では、男の装いについて触れ、色彩や装飾物をより自由に扱うことによってほんものの individualism を確立すべきだと力説している。

自らをも含む現代人（＝同時代人）の姿を鋭く観察し続けることによって、ワイルドは社会と慣習とが服装に強いる不自由と没個性を発見した。そうした圧力に抗して自由と個性とを勝ち取る為には、健康的に美しく装うことが必要だと彼は説く。この「装いの哲学」が美術の分野に適用されて書かれたのが“The Relation of Dress to Art”である。ここにおいてワイルドは、英国人の服装が改良され美しくなれば、芸術家は人生の美を視覚的に体験し、ほんものの芸術家になれると語る。“It is what one looks at, not what one listens to, that makes the art.”

1888年から2年間にわたってワイルドは、*The Woman's World* という婦人雑誌の編集の仕事を引き受け、この誌上においても独自の「装いの哲学」を展開している。要約して紹介する。「労働者階級の女性の服装には freedom（自由）があるが、上流階級の服装にはそれが無い。自由こそが服飾の美の原点であるにもかかわらず、上流階級の女性たちは胴を締めつけ肩と腰を強調して、自由と美から程遠い装いをしている」。その後、ワイルドは、20世紀においては男女という性の相違ではなく、各人が従事する職業が服装の種類を決定するようになるだろうと語っている。また、“dressmaking”を“a learned profession and fine art”と見做し「理性的で美しい装いを創り出す為には、均整美と健全さとは何かを熟知し、繊細な色彩感と材質を見極める鋭敏な能力を有することが必要である」と述べている。現実をしっかりと見据えた説得力のある論である。

同時代人の服装を注視し、これを批判することから始まって、ワイルドは自由と装いとの関係、芸術と装いとの関係、未来の装いについてというように、問題を深く掘り下げていった。このように、目前の現実から出発して、深遠な芸術論、意味深い社会論へと問題を尖锐化させてゆく過程と表裏一体になっているのが、自らを象徴化させてゆくという行為であった。“aesthetic costume”を脱ぎ棄てて“dandy”へと変身した後も種々様々な「装い」に身を固めて自らの哲学を世に問うたワイルドに、自らを象徴化してゆくことによってその存在の普遍性を願ったワイルドに、芸術家の真摯な姿勢を発見するのは私だけであろうか。“One should either be a work of art or wear a work of art”